

馬場孤蝶

古き東京を

思い出して





古き東京を思い出して



## 一

もうそろそろ『東京新繁昌記』というようなものが出て来るころになった。吾々はそういうものによって、前の東京を大分憶いだしたが、思えば東京——震災前の東京——は随分変っていた。いや、それは東京ばかりではなく、京都、大阪のような大都市は勿論のこと、少し大きい地方市ならば、この二十年この方だけの変化でも、

実に非常なものであるろうと思う。現に名古屋の街衢がいくの今の変わり方などは、その著るしい一例であることは疑いがないかろう。

これまでの大部分の都市は、町と村との混合の形であった。昔の東京の如きは、市のなかに山があり、森あり、畑があり、田さえあったくらいである。多くの地方市も東京ほどの程度ではないにしても、何処どこも余程そういう風なところがあつて、町と村との境界を何の辺どで附けていいか分らぬというような趣きはあつたろうと思われ。昔のように、世人せいじんの生計が楽であつた時代と違い、

誰でもがさまざまの度合どあいに於て、外へ出て働かなければならなかったので、都市では誰もが、出入りに便利な部分に住うことを欲するようになり、市内の住宅の数は見る見る増加し、空地が次第になくなって行くという有さまでであったのだ。東京などでは、大邸宅——大庭園——を持つということが非常な不経済であり、不便なことになってしまったので、それ等の大きい屋敷が売物に出て、小宅地に分割されるのが多いのだから、空地は今後ますます少なくなつて行くであろう。

僕等が少年の時分には、まだ旧江戸の面影だろうと思

わかるようなものが大分残っていた。一例を挙げれば、今の中央大学の前は法学院、その前はイギリス法律学校、その又前が明治義塾、その前身が三菱商業学校であったのだが、明治義塾時代までの校舎は、昔の侍屋敷のままの建物であった。いずれ何千石というようないわゆる布衣<sup>ほい</sup>以上の旗本か、それとも、もう少し大きい小名かの邸宅であったのであろう、大きな式台で、内には書院らしい部屋もあるという、日本建ての家としては可<sup>か</sup>なり広々とした建物であった。当時はそういう前代からの遺物である建物が錦町<sup>にしきちょう</sup>、神保町<sup>しんぼうちょう</sup>、猿楽町<sup>さるがくちょう</sup>、今川小路<sup>いまがわこうじ</sup>へかけ



て、幾つも見られ得たろうと思う。

今日も神田の西部は学校町である。だが、その時代はより多く学校町であった。学習院のあったのは、いまの商科大学の前あたりで、帝国大学の予備門も、法学部も、理学部も、その南手にあったのだらうと思う。唯ただ医学部と病院は今の帝国大学のある本郷の旧加賀侯邸にあったのだ。従って、神田のあのあたりは、本屋町ほんやまちといってよかった。勿論、新本のそう出版せられる時代ではなかつたので、大抵古本屋であった。これはそれより少し後のちになつてのことだが、駿河台下の停留所の西手の横町あた

りからまないたばし 俎橋へ抜けるひどく狭い町が殆ど軒ごとに古本屋であつたことを記憶している人は幾らもあるであろう。此の狭い横町が南の方を取り拡げられて、今の電車通りになつたことは、ここにいうまでもなからう。駿河台下からお茶水橋へ向う今の電車通りも小川町寄りのところは、電車開通のためにできたしんどう新道だと思ふ。昔の路はあの坂道の下り口おの西手の小さい横町を通るようになっていたのだ。

谷崎精二氏の前記『東京新繁昌記』中の神田の部には、神保町辺の火事のことを書いてあつたと思ふのだが、あ

の辺が震災前しんさいぜんに焼けたのは、明治四十二三年ごろであつたろうと思う。何んでも、春であつたかと思うのだが、三崎町あたりから出た火で、可なり広い地域へ焼け広がった。あの辺へんは二十五六年ごろに大火に逢い、その後ももう一回焼けたことがあるように記憶する。そういう風で神保町から錦町へかけての古い建物は、或あるいは焼け、或は改築されて、あの辺は震災前しんさいまえに既に新市街になつてしまつていたのだ。

坪内逍遙大人の『書生氣質』には淡路町あたりの横町で、学生が矢場（楊弓場）女に引張られるところがある。

なるほど、今の宝亭の横町にそんな家が二三軒あつた。<sup>うち</sup>それは明治十五六年ごろのことである。

淡路町にあつた共立学校は、今の開成中学の前身であるが、高橋是清、鈴木知雄氏等の創立した英語学校で、大学予備門、商業中学等の入学準備の学校であつた。今五六十年代の人でそこに学んだ人々は大分多かろうと思う。田島錦治氏の顔はよく覚えている。僕と同級にいたのは平田禿木、桑木巖翼、滝精一、立作太郎の諸氏であつた。島崎藤村君もあの学校にいたことがあるという。明治二十年ごろの試験成績表のなかでは、中村利彦（福

島) という名を見出すであろう。これは堺利彦君の前名で、福島は福岡の誤りである。

今の万世橋が昔の昌平橋であり、それと今の昌平橋との間に石造せきぞうの、下が水路を通すために、円形に二ヶ所開いておる橋があり、それを俗に眼鏡橋といつて、それが昔の万世橋よろずよばしであつたのだ。だから、昔の上野への本道はその橋を渡り、川に沿うて右折し、直ぐ左折し、又直に右折して、いわゆる御成道おなりみちになつていた。鉄道馬車の道もそういう風になつていたのであつた。御成道は将軍が上野へ参詣の通路に當つておつたのだらうが鉄道馬車の

通りだすまでは、実に狭い街であつた。あの街は後ではあと古い絵双紙や、絵本を売る店が何軒もできていたのだが、昔はあすこで眼に立ったのは、鎧や古馬具や、槍、刀と  
というような古武器を売る店であつた。弓矢を売る店も一軒黒門町あたりにあつたことを記憶する。

## 二

古い絵双紙には、上野公園の入口のあの広場に、風車かざぐるまのあるのがかいてあるだろうと思うのだが、勿論明治に

なつてできたものである。これは、鉄道馬車<sup>み</sup>ができた時分にはまだあつたかと思う。その時分には無論三橋<sup>みはし</sup>はあつた。この方は極近<sup>ごく</sup>ごろまであつたと思う。切通<sup>きりどお</sup>し下から広小路へ出る今の電車道は近年になつて開けた道で、あすこは板倉侯の邸であつた。その裏手の近ごろまで吹抜という寄席のあつた通り——南北の通りは昔からあつた。吹抜の筋向うあたりの西側の路次<sup>ろじ</sup>ようなところを入つたあたりに、大弓場<sup>だいきゆうば</sup>があり、それから南の方の横町に借馬屋があり、狭く短いものながら、馬場もあつて、そこで馬が乗れるようになっていた。それは、十六七年

から二十年ごろへかけてのころのことではあるが、それにしても、あの辺でさえ、そんな空地があったのだから、その時分の東京生活には余ほどの余裕があったことが推知できるであろう。

不忍池の縁が埋立てられて競馬場になったのは何時ごろであつたらうか、今明かには記憶しないが、明治十八年ごろにはもう馬場はできていた。そのまえはその廻りは草の生え茂つた極狭い路で、池の周囲まわりがもの寂びいて、如何にも風情があつた。その時分にはそういう池にくつついた草徑くさみちと茅町の池へ面した道路との間には、も



う一筋溝川みぞがわが流れており、それに月見橋だの、雪見橋だのという土橋どばしがかかっていた。そういう溝川と土橋は近年まで遺っていたが、何時かの博覧会の時か何かに埋められてしまった。

森鷗外大人の『雁』という小説には、本郷の龍岡町から岩崎邸の裏手を通って池の方へと下りて行く無縁坂あたりの方が書いてあるので、ひどく興を覚えたことがある。

大学の東端と丘続きになっている茅町の西側に、忍ヶ岡小学校というのがあったが、床次竹二郎とこなみ氏の出身校で

ある。

根津にあつた遊廓が今の洲崎へ移された年代を今記憶しないが、明治十七年ごろまではあすこに娼楼が一廓をなしていたと思う。藍染橋までは引手茶屋であつたらしく、花暖簾などが風にひるがえ翻るのを見たことがある。橋から先きが娼楼の区域で、権現の方へ曲っている八重垣町の方に大楼があつたのではなからうかと思う。とにかくおおや大八幡の跡はたというのが、温泉になり、旗亭になり、後のちに病院になつて極ごく近ごろまで遺っていたが、それは庭なども見事になかなかの大建物であつた。

今では、根津の大通りは動坂の方へと突き抜けておるのだが、昔はあの道は直きに突き当りになっていた。その突き当りになっていたところと、団子坂から谷中やなかへと通じている路との間は、池などのある邸のようなものになっていったようだ。或は田などもあったかも知れぬ。谷中の坂への上り口あがくちの右手の方は田になっていたのだから。

団子坂が改修されて長い坂路になったのは、七八年前かと思うのだから、あの坂のへんに曲って下りになっていたのを、藪蕎麦やぶそと菊人形ばと共に記憶している人は多い

であろう。そして、あの辺の路が今よりもずっと狭かったことはいうまでもあるまい。

菊人形といえ、入谷いりやの朝顔のことをいわなければならなくなるのだが、それは上野駅の北端あたりの右方うほうをば、狭いさまさまに折れ曲った小道へと入って行くのであった。両側は竹垣やら生籬いけがきやらで仕切った植木屋で、門を入ると、葦簾よしずで高く上の方を日蓋ひおいをして、その下へ板で花壇をこしらえてそれへ鉢入りの朝顔を列べてあった。朝顔は土鉢どばちに植えてあるのだが、それをば、陶せとの鉢のなかへ入れ子にしてあるのであった。客は薄暗い中で、

花の色の気に入ったのを選んで買い取って、自分で持つて帰るなり、配達を命ずるなりするのであった。七八月ごろの、天気の良い朝は、入谷の狭い路をそういう客が、花見か縁日かのように、ぞろぞろ歩いていたのであった。なにしろ、朝四時か五時に起きて、不忍しのばずの蓮を見がてら、入谷へ朝顔だけを見に行くというのだから、随分呑ん気な訳のものであった。その入谷を東へ抜けきると、その先きは、いわば漠々たる水田と行っていいくらいで、蓮池や稲田が青々と続いて、それを隔てて右寄りには浅草寺の塔や堂の屋根が見え、正面には、吉原の娼楼の洋館

まがいの塔や円蓋ドームのような屋根の一簇が見える。全くいい気分の眺めであった。無理のきくものなら、今日こんにちまでもあのままに遺して置きたい場所であった。

朝帰りの客、入谷の朝顔から帰る客は、よく根岸の笹の雪へ寄って、絹漉きぬごし豆腐へ葛餡くずあんをかけたのを菜さいにして、酒を飲んだり、飯を食ったりした。その時分は、笹の雪はこのあん掛け豆腐専門の家うちであったが、入谷の朝顔がなくなると共に、料理屋になり、今ではあの辺あたりには芸妓屋げいがしややできるまでになってしまった。

入谷の朝顔は明治三十年ごろまでは確かにあったと思

うのだが、菊人形の方は場所は変っても今日まで遺っておるけれども、朝顔見物の方は余りに呑ん気なことなので、何時の間にかなくなって、朝顔は縁日の草花屋が売っているくらいなものになってしまった。

『たけくらべ』の場面に取りられている大音寺前だいおんじまえ——坂本通りの三島神社の角を曲って吉原の裏手へと行く路——なども、寺などの生籬が道に沿うていて淋しい処であつて、浪人が廓くるわ通いの客を脅かしたという昔話も憶い出せるような場所であつた。

昔の東京は震災までにもう大部分滅されていた。そこ

へ持って来て、あの大地震災であつた。沿革も風情もあつたものではない。なにもかも骨灰こつばいになつてしまつたのだ。ついこのごろの新聞には日本堤を削り取ることになつたとあつた。もう別に風情のある場所ではなくなつたのだから、便利のための変革はむしろ歓迎すべきであらう。

## 三

龍岡町の南端、牛肉屋豊国の前に当る、大学の長屋の角の大きいけやき槻の柱に刀でさんざんに切り込んだあとが



遺っていた。俗には、それを化物柱だといい、それが夜なかには化物に見えるので、通りがかりの侍が引き抜いて切りつけるので、あんな痕が遺っておるのだといい伝えていた。しかし、あれは、酔った侍などが大諸侯に対する反抗心などもあり、要するに、いたずらところ悪戯心から、すっぱ抜いて切りつけたにすぎないものである。

あれから南への左側、今本郷区役所になっておるところまでは、りんしょういん麟祥院のからたちがき枳穀垣であつた。その垣根のために麟祥院を俗にからたち寺といっていた。この寺は春日の局の菩提所なんだそうだが、昔は、切通しの通へもつ

と境内が出ていたのだ。明治二十四五年ごろに道を拡げ  
 するために、寺の地面を切り取ったので、寺の塀へいぎわ際にあつ  
 た榎とか檜などのような巨幹の老樹が路傍みちばたに遺つて、そ  
 の蔭に町家ちやうかが建つた。大きな根張りの木の下小暗したおぐらきまで  
 に茂つた樹の蔭に、鮎屋などの暖簾が見えるというよう  
 なのは、なかなか面白い風情であつたのだが、そういう  
 老樹も何時の間にか伐り倒されて、道は今のような有り  
 ふれた電車路になつてしまった。

「夕じほの切り通し坂をわれ行けばあらあらと車飛ぶ  
 なり。これは近きころできたるばかな会といへるの詠えい

草<sup>そう</sup>なりとぞ」

そんなような意味のことを、齋藤緑雨が随筆のなかへ書いたのは、明治三十年ごろなのだから、まだ老樹が路端にあった時分のことである。今は、吉原通いも電車か、自動車になってしまったので、朦朧<sup>もうろう</sup>車夫<sup>しやふ</sup>の駈<sup>か</sup>けながら出す『あらよ』の掛け声も聞かれなくなったであろう。

本郷三丁目から切り通しへ向う街は北側は昔は俚俗<sup>りぞく</sup>盲<sup>めくら</sup>長屋<sup>ちやう</sup>といった本富士<sup>ほんふじ</sup>町<sup>まち</sup>であり、南側は春木<sup>はるきちよう</sup>町であるが、その春木町は、二三度焼けたと思う。中央会堂の焼け残りの煉瓦の壁のところへ、夜半の月がかかっているのを、

廃墟の月というような気がして、風情ある眺めだと見て  
 過ぎたことを覚えている。明治十五六年ごろには、中央  
 会堂の横手の横町を入ったところに大弓場が<sup>だいきゆうば</sup>あつて、そ  
 こでは<sup>のち</sup>後に一つ橋の高商の弓の教師になつた窪田藤信  
 （当時は金作）氏などと落ち合つたことを記憶する。そ  
 の大弓場の<sup>あるじ</sup>主の高木清吉というのはそのあと下谷区西  
 町へ移つて、<sup>いば</sup>射場を開いていて、明治二十一二年ごろ、  
 そこで画家村田丹陵氏や、今、日本銀行の理事をしてい  
 る河田敬三氏などと一二度一緒に弓を射たことがあつ  
 た。何しろ、大弓場といえは家ともに長さ十七八間に幅

二間ぐらいは要したのであって、当時では、それだけの地面をば、そんな場末でない部分において、大弓場というような収入の少い商売に使ったのであるから、その時代の一般の経済状態も大抵推定できるであろう。

本郷座は春木座といった。僕などはどうも今でもツイ昔の名をいっていかぬ。もう七八年ほど前、ある席でツイ春木座と行ってしまふと、座にいた下谷の老妓にこれは嬉しいと行ってひどくほめられた。その春木座も震災までに二度ぐらいは焼けたろうかと思う。昔は大劇場のうちに入っていたらしいのだが、中ごろ衰えていて、大阪

から明治十六七年ごろ鳥熊という興行師が芝鶴しかく、鯉之丞こいのじようなどという役者の一座を連れて来て大入場おおいりばを広くし、弁当をひどく安くし、その上に、雨天の日など、客が帰るまでに、客の穿き物を洗って置くというような新興行法でもって、ひどい当りを取った。この興行法は東京の大劇場へまで影響を及ぼして、それ以後は何処でも大入場を取り扱げたようであった。

明治十二三年ごろは大学の構内には、医科即ち当時は医学部といていたのがあったばかりで、此の旧加賀邸の赤門寄りの方は、茫々たる薄原すすきはらで、その草の間に、

昔の井戸の跡なのであるうが、黒く塗った木を框わくにして、危険除よけの目印にしてあるのが幾つとなく見えるのが、ひどく寂しく感ぜられた。門をはいって右手寄りには、椿の一杯生えた円形の小山があつて、冬になると、よく鳩がかしわの腹を木の間から見せた。其所は、加賀騒動のなかの浅尾という悪女中を蛇責へびぜめにして埋めたところだという俗伝があつた。けれども、それは古墳の跡らしかった。十七八年ごろ発掘したが、石垣のようなものがあったのみで、別に何も出て来なかつた。どうもその昔一度発掘したことがあるらしいという鑑定であつたとか聞

いた。

その時分には、その草原くさはらには狐が大分いた。夕方など、尾を長く引いた褐色の小犬ぐらいの獣が、後あとを見返り見返り草のなかへのろのろと逃げ込んで行くのをよく見かけたものだ。雪の降る前の夜よなど、ギヤア——ギヤアと、ギヤア——ギヤアと、ギヤアばかりであった。ツイこのごろ読んだあの書には雄狐はコンコンと鳴き、雌狐はギヤア——ギヤアと鳴くと書いてあった。それが本当ならば僕は雌狐の



声ばかり聞いたわけになるのだが、何んなものであるのか。

永井荷風君の小説のなかに、君のお住居で狐狩をするところがあつたと思う。確かそのお邸は小石川水道町であつたろうと思う。昔は少し広い邸などには狐などが何処にもいたらしいのだ。今は郊外でさえ実際狐のいるお稲荷さんはめつたにないであろう。

大学構内には池寄いけよりの方に雑木や藪などのある小さい小山があつた。上り路のぼが迂回してついでるので、栄螺山さざえやまと呼ばれていた。その頂いただきからは、小石川の砲兵工廠の

裏手あたりは勿論のこと、神田、日本橋へかけての下町が、随分遠くまで見渡せるのであつたが、その時分には、下町の方面でも東神田から、浜町辺へかけては、樹木のあるところが余ほど多かつた。家の屋根と、そういう樹木が錯綜しているところが実に心持のいい眺めであつた。

震災前までは、浜町あたりにはまだ大きい庭のある邸が遺つていた。俗に細川邸といつていた大川端の長岡護もり美子よし爵の塀際の櫛の樹のことは荷風君も何かで書いておいでなんだが、あの外ほかにも、よほど高い築山が青々と塀の上から見えている邸が水天宮の裏手あたりにあつた。

箱崎の上州侯の邸も庭が幾分は遺っていたろうと思う。そんなのが皆、諸所にあつた緑樹とともにあの業火ごうかのためは無慙に一掃されてしまったのだから、返らぬこととは知りながら、如何にも惜しいという一言は口から洩らさずにはいられない。

筆はここで一転するわけになるが、僕の少年時分には、大学の赤門前などは、まるで田舎であつた。確に兼安までは江戸のうちで、それから先きは何うしても宿場といわなければならなかつた。縄暖簾の居酒屋あり、車大工の店あり、小宿屋ありという風で、その前をば、汚さを極

めた幌かけの危うげな車体をば瘦せ馬に輓かせたいわゆる円太郎馬車がガラツ駈けを追って通るのだから、今の大抵の田舎町よりもなお田舎びているくらいであった。

西片町の台——そこも茶畑であつた——から眺めると、白山下はくさんしたのところはずっと水田であつて、畦間けいかんのはしばみなどの雑木のひよろひよろと立っている景色が、夕方などは何ともいえずもの淋しく見えた。それらの田の埋立てられた跡が、今の指ヶ谷町ささやちようの芸者町から南へかけての街区である。





日本文学電子図書館

---

古き東京を思い出して

著 者：馬場孤蝶

制作者：宮澤一郎

底 本：「明治の東京」

中央公論社

昭和17年5月15日 印刷

昭和17年5月20日 発行



日本文学電子図書館